

# 大学院管楽器

## プロフェッショナル研究発表演奏会

- 極月を彩る管楽器の饗宴 -

2022年11月27日(日)

開場：13時30分／開演：14時

洗足学園音楽大学シルバーマウンテン地下1階

△ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い、咳エチケットの励行にご協力ください
- ・演奏者への声援などの大声、対面での会話はお控えください
- ・休憩時や終演後は、スタッフが扉を開けてから空いている場所よりご退場ください
- ・客席内やロビーでの飲食はご遠慮ください
- ・出場者との面会、花束等のプレゼントはご遠慮ください
- ・万一、集団感染発生の際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます

# Program

## 石毛 里佳／妖精の森

Fl.1st 石井 優菜 2nd (Picc.) 袁 玥 3rd 村松 紀親 4th 間木平 美和 Alt. 李 治嶋

## 天野 正道／クールール・エ・ムーヴマン

Fl.1st (Picc.) 村松 紀親 2nd 間木平 美和 3rd 石井 優菜 Alt. 李 治嶋 Bass. 袁 玥

## J.S.バッハ／シャコンヌ

Euph. 丸山 奈央 T Sax. 清 達哉 B Sax. 盛 禮正 Bass Sax. 張 鑫

## O.ベーム／金管6重奏 Op.30 第1.4楽章

Tp.1st 佐藤 心 2nd 濱欠 直毅 Cort.1st(Tp.) 速水 力 2nd(Tp.) 中山 亜美  
F.Hr.1st(Tp.) 長田 彩希 2nd(Tp.) 五月女 啓太

## J.アンデルセン／軍隊風アレグロ Op.48

Fl.1st 石井 優菜 2nd 間木平 美和 Pf. 樋口 歌織

## R.シューマン／おとぎ話 Op.132

Cl. 元村 理乃 Va. 加藤 加奈子 Pf. 加藤 幸恵

～休憩 (15分)～

## F.プーランク／バレエ音楽「牝鹿」より 第1.2.5楽章

Cond. 松下 倫士

Fl.1st 石井 優菜 李 治嶋 渡部 亨(教員) 2nd 間木平 美和 袁 玥 Picc. 村松 紀親  
Ob.1st 長井 千佳(賛助) 2nd 佐藤 千尋 Cl. 元村 理乃  
A Sax. 盛 禮正 岩本 伸一(教員) T Sax. 張 鑫 B Sax. 清 達哉  
Tp.1st 佐藤 心 速水 力 2nd 濱欠 直毅 3rd 長田 彩希 Euph. 丸山 奈央  
Perc. 高橋 芽生(賛助) 趙 伯良(賛助) Pf. 斎藤 光(賛助)

# Program Note

## 1. 石毛里佳／妖精の森

千葉県出身の作曲家。東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業後、吹奏楽曲やアンサンブル曲を多数作曲、編曲し楽譜を出版している。現在は吹奏楽、ポピュラー音楽に加えて歌唱曲も作曲している。その作品は全日本吹奏楽コンクールの自由曲として取り上げられることも多い。

神秘的な序奏、流れのあるメロディ、スピード感のあるリズムなどフルートの持っている楽器性能を十分に生かして作曲されている。曲全体としてはアンダンテとアレグロの二部構成となっており、一部はピッコロ、フルート、アルト・フルートそれぞれの特徴を活かした旋律が美しい。二部は連符が楽器の間で飛び交い、緊張した雰囲気になる。短い曲なので様々な場面で演奏でき、コンクールなどでも聴き映えする作品であろう。

(院1年 袁 玥)

## 2. 天野正道／クールール・エ・ムーヴマン

秋田市出身の作曲家。国立音楽大学作曲科首席卒業。武岡賞受賞。同大学院作曲専攻創作科首席修了。卒業後毫州に赴き日本人で初めてC.M.Iをマスター、CD国内初制作のアーティストとなる。また1992年から現在まで続いている国立ワルシャワ交響楽団、ヴェルサイユ室内管弦楽団で自作曲の録音・指揮やWarsaw Brass、Trio Classic、Paderewski Festivalよりの委嘱を受けるなど現在中欧を中心に活動している。第23回、24回日本アカデミー賞音楽部門優勝賞受賞。第10回日本管打・吹奏楽アカデミー賞作・編曲部門受賞。

この作品は大きく分けて2つの部分から成り立っている。前半は色彩を意識しており、後半は躍動感や流れといったことを意識している。フルート族はあまり音色の変化がない楽器と思われがちだが、倍音の混ぜ具合を工夫するといろいろな音色の変化を楽しめる楽器だ。また、運動性にも富んでいるので素早い動きも得意である。

(院1年 袁 玥)

### 3. J.S.バッハ／シャコンヌ

ドイツの作曲家、ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685~1750)により作曲された「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番ニ短調 BWV1004 第5楽章「シャコンヌ」は、「パルティータ第2番」の全5楽章の中でも特に有名であり、後にフェルッチョ・ブゾーニによるピアノ版や、レオポルド・ストコフスキーのオーケストラ版など様々な作曲家により編曲されている。

「シャコンヌ」は、少し穏やかな三拍子の舞曲の形式である。冒頭の8小節のメロディがテーマとなり、30回ほど変奏を繰り返しながら演奏される。今回はこれをユーフォニアムとサクソフォンの四重奏で演奏する。サクソルン属ならではの丸みのある暖かい音色をお聴きいただきたい。

(院2年 丸山 奈央)

### 4. O.ベーム／金管6重奏 Op.30 第1.4楽章

ドイツ出身のトランペット奏者、作曲家のオスカー・ベーム(1870-?)により書かれた。本来この曲は4楽章で構成される金管6重奏の曲だが、今回は1楽章 *Adagio ma non tanto molto* 4楽章 *Allegro con spirit* をトランペット6重奏で演奏する。

曲の冒頭はゆったりとしたテンポで始まり、透き通るような美しいメロディで各パートが重なっていき、その後テンポが加速して曲の雰囲気はとても感情的に展開していく。

各パートの掛け合いはアンサンブルという観点では難しくも聴きどころである。

(院1年 長田 彩希)

### 5. J.アンデルセン／軍隊風アレグロ Op.48

デンマークのフルート奏者、作曲家、指揮者である K.J.アンデルセン(1847-1909)により作曲された。軍人の父親への敬意を込めてこの曲が作曲されたと言われている。

この曲は単一楽章で構成され、ピアノの駆け抜けるような前奏から始まり、フルートの技巧的で伸びやかなメロディが多彩な性格で奏されていき、中盤にはソロも登場して勇敢・悲壮・激動の歴史を全て物語っているような聴きごたえも吹きごたえもある曲である。伴奏部がオーケストラで演奏される事もある華やかな一曲である。

(院2年 石井 優菜)

## 6. R.シューマン／おとぎ話 Op.132

ドイツの作曲家であるシューマンによって1853年に彼の晩年に書かれた曲である。この曲は、弟子のアルベルト・ディートリヒに友情を込めて献呈された。

全章を通して穏やかで、独特な内向的な美しさもあり、ときには激しく、ロマン的な曲想である。晩年のシューマンの作風そのままに、内に秘めた優しさも感じられる。

そして、ヴィオラ、クラリネット、ピアノという珍しい編成である。ヴィオラとクラリネットは音域が近く、それに心地よく軽やかなピアノ伴奏も重なり、その重なった音が明るさや優しさ、そして時には不安や暗さも表現する。

(院2年 元村 理乃)

## 7. バレエ音楽「牝鹿」より 第1.2.5楽章

1923年当時、フランスの作曲家ダリウス・ミヨーと共にイタリアへ旅行していたプーランクは、ロシアのバレエ団である『バレエ・リュス』を率いるセルゲイ・ディアギレフから現代版『レ・シルフィード』の作曲を依頼され、バレエ音楽の作曲を始めた。バレエの作風は、フランスの女性画家であるマリー・ローランサンの絵画に触発されており、1920年代初頭のサロンにおける『優雅な宴』の気分を再現したものである以外に明確な筋書きをもたない。タイトルはプーランクがヴァランティエヌ・グロスとタクシーに乗っている時に思いついた。

軽快で瑞々しい音楽はプーランクの個性が発揮されているが、プーランク自身はチャイコフスキーの『眠れる森の美女』のヴァリアシオン、ストラヴィンスキーの『プルチネラ』や『マヴラ』の影響を受けたと語っている。

今回はトランペットを4本入れた華やかな編成で、第1曲、第2曲、そして第5曲を演奏する。

(院1年 濱欠直毅)

# Member

Flute	袁 玥	李 治皜		
	石井 優菜	間木平 美和	村松 紀親	
Oboe	佐藤 千尋	長井 千佳 <sup>+</sup>		
Clarinet	元村 理乃			
Saxophone	盛 禮正	張 鑫	清 達哉	
Trumpet	佐藤 心	長田 彩希	濱欠 直毅	速水 力
	五月女 啓太 <sup>+</sup>	中山 亜美 <sup>+</sup>		
Euphonium	丸山 奈央			
Percussion	高橋 芽生 <sup>+</sup>	趙 伯良 <sup>+</sup>		
Viola	加藤 可奈子 <sup>+</sup>			
Piano	齋藤 光 <sup>*</sup>	加藤 幸恵 <sup>+</sup>	樋口 歌織 <sup>+</sup>	
				<sup>+</sup> ：賛助 <sup>*</sup> ：演奏補助要員
運営責任者	渡部 亨			
指導教員	岩本 伸一	上田 恭子	大浦 綾子	菅井 春恵
	古田 俊博	松下 倫士	渡部 亨	
アカデミックコーディネーター	岩岡 一志			